

経過観察による薬剤師の医療安全の確保－5 地域薬局における薬剤師の責務
○福島 紀子¹, 秋本 義雄², 鈴木 順子³, 鈴木 政雄⁴, 宮本 法子⁵, 喜来 望³,
山本 大介³(¹慶應大薬,²東邦大薬,³北里大薬,⁴帝京平成大薬,⁵東京薬大薬)

【目的】平成 24 年度調剤報酬改定において、薬剤服用歴管理指導として薬歴を活用したこれまでの業務に加え残薬確認が明記された。このことは、薬剤師が服用後のコンプライアンスの状況や薬の効果についての経過観察を実施することを意図しており、副作用防止の観点から極めて重要な意味を持つ。特にチーム医療の中で薬剤師の経過観察が薬剤使用の安全確保に活かされると考える。そこで患者の過量服用を防止できなかった医療訴訟の裁判例を基に、地域薬局における薬剤師の責務について考察する。

【裁判事例】うつ病と診断された患者が過量服用による薬物中毒で死亡したことについて、その家族である原告 X が、担当 Y 医師らに対し過量服用の際の注意義務違反として訴えた事例（平成 24. 3. 30 大阪地裁 平 20（ワ）5089 号）

【裁判所の判断】「…を処方するに際し、本件患者に対して過量服用しないようにと指導しているのであるから、過量服用した場合の措置を指導することは適切ではないとしても、その夫である原告 X に対して本件患者が過量服用した場合には、医療機関の診療時間でなければ 119 番通報することも含めて直ちに医療機関を受診するように指導すべき注意義務があった」として注意義務違反を認めた。

【考察】裁判記録には、薬剤師の関与の記載はない。しかし長期にわたり抗うつ薬が処方され、家族が残薬確認や保管管理に苦勞している記載が見られた。裁判所の判断にある注意義務については薬剤師が服薬指導時に関われる範囲であり、残薬確認を含めた経過観察は薬局薬剤師の責務となる。薬局での投薬時には患者の症状をよく観察し、残薬の状況を把握し、主治医と連携をとり患者の安全確保に努めなくてはならない。そうすることが過量服薬からの脱却にも繋がる。